Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-30

バルサックとフランス近代の金融社会 : 『ゴプセック』から『ニュシンゲン銀行』へ

吉田, 典子

(Citation)
近代,83:67-92

(Issue Date)
1998-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001604

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001604

KOBE UNIVERSITY

バルザックとフランス近代の金融社会

『ゴプセック』から『ニュシンゲン銀行』へ[1]

吉田典子

1　はじめに——ゾラとバルザック

ゾラ（一八四〇—一九〇二）が『ルゴン＝マカール叢書』を構想するにあたって、バルザック（一七九九—一八五〇）の『人間喜劇』に影響を受けたことはよく知られている。すなわち、バルザックがフランス革命後から十九世紀前半にかけての時代——第一共和政、第一帝政、王政復古、七月王政——を背景として、各社会階層や各地方に生きる人間のタブローを描き、全体としてひとつの完全な社会絵巻を創り出したのに対し、ゾラは第二帝政期を背景として、同じように壮大な小説群を構想したのだった。

ゾラがバルザックについて比較的まとまった論考を書いているのは、一八七〇年五月一三日の〈ル・ラペル〉Le Rappel 紙においてである。[2] ここで彼はミシェル・レヴィ書店から刊行中の『人間喜劇』の書評という形で、バルザックの作品の現代性を主張している。バルザックは同時代の人々から、「人間をあまりにも卑劣なものとして描き、物

語を恥辱と犯罪でいっぱいにしたと非難されてきた」とゾラは言う。しかし「その一五年か二〇年ののち、第二帝政はバルザックの怪物たちを現実のものとした」のだった。「現代のユウェナリス〔紀元一世紀のローマの諷刺詩人〕の想像力は、むしろ現実によって凌駕された」のである。ゾラはまた「バルザックは幻視者（voyant）であって、クーデタ後の獲物の分配（la curée）を見抜いただけだ」とも述べている。[3]

このバルザック論を書いていたとき、ゾラはちょうど第二巻目の『獲物の分け前』*La Curée* の準備を進めていた。この作品のタイトルと内容がはっきりと表明されるのは、バルザック論が出た二週間ほど後の五月二七日、〈ラ・クロッシュ〉紙編集長ルイ・ユルバックに宛てて書いた手紙の中である。[4] ゾラはここで、「クーデタから生まれた速成の財産、それに続いた恐るべき金銭の浪費、快楽の中に解き放たれた欲望、社交界のスキャンダルなど」を研究するつもりであること、背景としては「成り上がり、すなわちパリの解体と再建事業で何百万もの金を稼いだ人々の世界」を取り上げるつもりであることを述べ、投機師アリスティッド・サカールを主人公とした小説の構想を提示する。こうしてゾラは、十九世紀半ばから後半にかけてのフランス経済の急成長を担った新興の金融資本家の世界と、パリ改造事業によって誘発された土地投機をめぐっての駆け引きを小説化したわけであるが、金融の世界を小説化した点において、バルザックはやはりゾラの先駆者であった。

先のバルザック論の中で、ゾラは次のように述べている。「バルザックがうれしげに扱っていたあのように莫大な財産は、われわれの目前で、十倍にもなり、スキャンダルにまみれて出現した。人々はバルザックに対して、何百万もの金を積み重ねすぎたことを非難し、彼の登場人物たちは金を儲けすぎると考えてきたが、それはその紳士方が、実は現代の人々だったからである。いやむしろ、盗んできたわずか数百万の金しか持たない彼らは、今日ではむしろ小者でしかないだろう。（中略）現代では、われわれは通りを曲がるごとにニュシンゲンに出会う。オオヤマネコ

「投機師のこと」は大軍になった。連中は帝政を糧として生き、帝政を支えている。バルザックがその巨大な財産を夢みながら、熱に浮かされるように黄金の中に手を浸していたとき、彼は現代の金融事件（aventures financières）を予感していたのではないだろうか」[5]（強調引用者）

ここでサカールを予告する人物としてゾラの念頭にあるのは、文中にその名前がある銀行家ニュシンゲン男爵である。彼は『人間喜劇』中でもっとも登場回数の多い人物のひとりであり、アルザス訛りの台詞が特徴的な大男であるが、一般には『ゴリオじいさん』*Le Père Goriot* の中のゴリオの次女デルフィーヌの冷酷な夫として、また『浮かれ女盛衰記』*Splendeurs et misères des coutisanes* の中では、リュシアン・ド・リュバンプレの恋人である「しびれえい」ことエステル・ヴァン・ゴプセックに横恋慕し、彼女を自殺に至らしめる醜悪な人物として知られている。しかし他方では、彼は「金融界の象」（éléphant de la finance）として財界の頂点に立つ人物であり、バルザックにおいて「銀行」なるものを体現する人物でもある。ニュシンゲンのこの側面が描かれているのは、『ニュシンゲン銀行』*La Maison Nucingen*[6] という中編である。先のゾラの引用中にあったように投機師のことを「オオヤマネコ」（loup-cervier）と呼んでいるのもこの作品であるが、これは『人間喜劇』の中でもこれまで論じられることが少なく、またその主題や語り口ゆえに読者にとってなじみにくい小説でもある。

本論では、この『ニュシンゲン銀行』において、銀行家がどのような人物として描かれているのか、またこの小説はどのような社会的現実を反映しているのかを考察したいと思うが、ここで同時に考察の対象にしたいのは、同じく金融の世界を扱ったバルザックの小説『ゴプセック』*Gobseck*[7] である。ゴプセックはよく知られているように、強欲きわまりない高利貸でありながら、社会と人間に関する哲学者的な観察眼を持った手形割引人である。もっともこれら二つの作品は、『人間喜劇』中で特に関連づけられているわけではない。前者は「私生活情景」に分類されてい

るし、後者は「パリ生活情景」に含まれている。しかしこの両作品を読み比べてみると、そこには単に「高利貸」と「銀行家」の相違があるばかりでなく、対作品とも言えるほどに、語りの形式や登場人物に対照的と思われるような要素が多く認められる。しかもその相違が、一八三〇年の七月革命をはさんでの時代の変化や金融社会の変化と呼応しているように思われるのである。

ここではまず、両作品の紹介を兼ねて、語りの形式の共通点とコントラスト、作品の成立過程などを検討することからはじめたい。次にゴプセックとニュシンゲンという二人の金融業者を対照させ、さらにバルザックの描いた同時代の経済状況へと論を進めたいと思う。

2 『ゴプセック』（一八三〇年、一八三五年に改変）

『ゴプセック』の中心的な語り手は、代訴人デルヴィルである。バルザックは若い頃、文学修行を始める前に、ジャン＝バティスト・ギヨネ＝メルヴィルという代訴人の事務所で法律業務の見習いをしていたことがあり、一般にはこの篤実な人物がデルヴィルのモデルであると言われている。デルヴィルは、『シャベール大佐』*Le Colonel Chabert*（一八三二）においても、人間に関する深い洞察力を持った優秀な代訴人として活躍する人物である。『人間喜劇』における「医者」の筆頭がビアンションであるなら、「代訴人」の筆頭はこのデルヴィルであると言えるだろう。この二人は、『人間喜劇』のなかにしばしば再登場する人物でありながら、奇妙なことにその身体的描写はほとんど行われておらず、またいずれも巧みな語り手であるという特徴を持つ。

さて、『ゴプセック』の語りの舞台は、パリの古くからの貴族街、フォーブール・サン＝ジェルマンにあるグラン

リュー子爵夫人の館のサロンである。時は一八三〇年一月、午前一時を過ぎて客たちが帰ったあと、部屋に残ったのは子爵夫人と娘のカミーユ、夫人の兄のボルン伯爵、そして一家の友人のデルヴィルである。子爵夫人はカミーユが、若いエルネスト・ド・レストー伯爵に好意を寄せているらしいことに懸念を抱いていた。なぜならエルネストは、すぐれた青年ではあるが財産はなく、しかも彼の母親は、あのゴリオの娘であるレストー伯爵夫人アナスタジーだからである。アナスタジーはゴリオが甘やかし放題に育てた二人娘の姉の方で、賭事好きのダンディ、マクシム・ド・トライユ伯爵に夢中になり、家宝のダイヤモンドまでも持ち出してゴプセックから借金を重ね、ついには父親の死をも招いた女であった（『ゴリオじいさん』参照）。デルヴィルは、レストーの子息の財産が無事であることを話してグランリュー母娘を安心させるために、自分がかつて隣人だった高利貸ゴプセックとの出会いから、その死に至るまでの話を物語る。そこではレストー家の財産をめぐってのドラマが展開される一方で、ゴプセックという特異な高利貸の姿が、浮き彫りにされていく。デルヴィルの話の中には、一部ゴプセック自身の語りも挿入されていて、小説の語りの構造はやや複雑な様相を呈している。だが全体としてはきわめて緊迫感があり、読者を最後まで一気に引きつける力を持っていると言えるだろう。

この作品は最初、一八三〇年三月に、『高利貸』*L'Usurier* というタイトルで〈ラ・モード〉誌に一部のみが発表され、ついで同年の四月、『不身持ちの危険』*Les Dangers de l'inconduite* と題されて、小説集『私生活情景』第一巻に発表された。しかし一八三五年に『十九世紀風俗研究』（ベシェ書店）に収録されたときには、かなりの改訂が行われ、表題も、『不身持ちの危険』から『ゴプセック親父』*Papa Gobseck* に変更される。そして一八四二年九月、『人間喜劇』（フュルヌ版）第二巻目に収録されたときに、テクストにはほとんど変更はないものの、表題は最終的に『ゴプセック』となった。

一八三五年の改変は、大きく言って二つの点に関わっている。一八三四年から三五年初めにかけては『ゴリオじいさん』執筆の年であり、この作品とともに人物再登場の方法が意識的に用いられるようになった時期である。『ゴプセック』は『ゴリオじいさん』と関係の深い作品であり、改変の目的は、第一に、この作品を『人間喜劇』全体の中に有機的に組み入れることにあった。もうひとつの大きな改変のポイントは、物語の中心がレストー伯爵夫人からゴプセック自身へと移行したことである。それは表題が『不身持ちの危険』から『ゴプセック親父』に変更されたことによっても確認することができる。『不身持ちの危険』というタイトルが表すのは、ひとつの「私生活情景」であり、愛人のために高利貸からの借金を重ね、ついには夫や子供の財産までも危うくする女の物語であり、そこから導かれる教訓であった。結末部は、伯爵夫人の矛盾に満ちた特異な性格を浮き彫りにする。つまり一方では自らの行状を後悔し、子供たちに心からの愛情をそそぎながら、他方では瀕死の夫の周囲に厳格な監視体制を敷き、財産を夫の自由にはさせまいとして、そのためには「犯罪さえも犯しかねない」悪魔的な女の姿である。彼女が夫の死後、子供たちに財産を保証するための書類を誤って焼き捨てるところで、この話はほぼ終わっている。つまり『不身持ちの危険』においては、『ゴプセック』の最後にある高利貸の死の場面はまだ存在しないのである。ゴプセックがどうなるかと言えば、彼は高利貸をやめ、代議士に任命され、さらに男爵の位と勲章を欲しているという簡略な記述がある。そしてデルヴィルがゴプセックに、エルネストが成年に達してカミーユと結婚したがっていることを告げると、彼はその縁組みを十分に斟酌した上で、財産の返還に応じるのである。しかし一八三五年の改変においてバルザックは、あくまでも強欲なゴプセックを描き出す。高利貸は伯爵夫人が証書を焼き捨てたのをいいことにして、財産の返還を一日延ばしにする。それは「年齢とともに一種の狂気と化した情念の進行」[8]であった。バルザックはゴプセックの壮絶な最期の場面を書き加えただけでなく、ユダヤ系オランダ人としての彼の出自や、波瀾万丈の過去も付け加えることで、

この人物像に深みを与えている。この改変によって、ゴプセックはあくまでもゴプセックであり続け、ゴプセックとして死んでいくことになる。それはあれほど人間や社会に対する透徹したまなざしを持ちながら、自らの情念を制御することができずに死んでいくひとりの男の悲劇である。

3 『ニュシンゲン銀行』（一八三八）

一八三七年一一月に執筆された『ニュシンゲン銀行』も、『ゴプセック』と同様に、四人の会話の中で物語が語られるという形をとっている。しかしその雰囲気は『ゴプセック』とは正反対と言っていいくらい異なっている。時は一八三六年、場所は華やかなパリの一流ナイトクラブの個室である。そこに四人の人物が集まって食事をし、仲間同士の遠慮のない雑談に花を咲かせるのであるが、この会話にはさらに枠がはめられていて、隣の個室にいる「われわれ」、すなわち「私」と人目を忍ぶ連れの女性とが、薄い仕切り壁を通して隣室の会話を盗み聞くという形を取っている。さて、隣室の四人とは、「現代」という時代の先端にあぶくのように生きている「産業」界の「才気煥発な荒武者」どもである。すなわち新聞・雑誌の経営者であり編集責任者である「産業界の大立者」アンドッシュ・フィノ、彼の追従者である新聞記者のエミール・ブロンデ、投機師のクーチュール、そして「とてつもない才気と辛辣さで知られる厭世家の道化者」ジャン＝ジャック・ビジウである。このビジウが中心的な語り手となるのであるが、彼は『平役人』*Les Employés*（一八三七）という作品にすでに登場していた人物で、美術学校（ボー・ザール）にしばらく通ったのち、大蔵省の事務員として七年間「苦役」をつとめ、その後カリカチュア作者としてすぐれた才能を発揮する。しかしその生活ぶりは無軌道で気まぐれであり、決して落ち着いた仕事をすることはできず、他人の家にしばしば寄食してい

る。彼は自身、一個の「芸術家（アルティスト）」であって、この作品に見られるような「恐るべき即興話」の名手である。彼の話しぶりは、登場人物の台詞に合わせてさまざまに声色を変化させ、所作や身振りをまじえ、周囲の物音までも再現するという見事なものであった。バルザックがこのビジウのモデルにしたのは、友人の文学者であり、カリカチュア作者、かつ俳優でもあったアンリ・モニエ（一八〇五―一八七七）であると言われている。俗物ブルジョワの典型であるあの「ジョゼフ・プリュドム氏」を創造し、それを文筆・戯画・演技の三つの手段を総合して展開した作者である。しかしバルザック自身もこのような座談の名手であり、自分の作品を朗読するときには、さまざまな声色を使い分けたと言う。いずれにしても『ニュシンゲン銀行』の枠組みを構成しているこのようなレストランの個室での会話は、バルザック自身が一八三〇年頃からしばしばつきあっていたブールヴァール界隈の常連たち、エルネスト・ロックプランやジュール・ジャナン、ウージェーヌ・シューなどのジャーナリストや文学者仲間との体験に基づいているとされる。

さて、このビジウの語りは、誠実で実直な代訴人デルヴィルの語りとは正反対であり、読者は自分がどこに導かれるのかほとんど見当がつかない。しかも他の三人、とくにブロンデがときどき勝手な口をはさんで衒学的な注釈を加えるために、ますます話は散漫な方向へと向かうように思える。この会話を報告する「私」自身が、「そこに述べられた意見も形式も、文学的な条件をまったく満たしていない」と前もって断っているのである。しかしそれがいかに伝統的な「文学」の概念から離れているとはいっても、それは「われわれの時代を描き出す陰惨な出来事の雑録であり、現代とはまた、そのような話しか語るべきでないような時代」でもあるのだった。[9]

話題はまずラスティニャックのことである。一八一九年にはカルチエ・ラタンの惨めな賄い付き下宿にいて、一八二七年にはまだ「一文なし」だったラスティニャックが、どのようにして今のような財産を作ったのかということをビジウが説明するというのである。したがってこれは、ある意味で『ゴリオじいさん』の続編である。ラスティニャッ

クの愛人デルフィーヌ・ド・ニュシンゲンは、ゴリオの次女であって、ラスティニャックの財産の起源には彼女の夫のニュシンゲン男爵が関わっているらしいのである。しかしビジウの話はとても一直線にはいかない。彼が長々と語るのは、今は落ちぶれて名前を覚えている人もいない往時のダンディ、ゴドフロワ・ド・ボードノールの話であり、ボードノールが一目惚れする金髪で小柄な美女イゾールと、対照的なブルネットで大柄の姉マルヴィナ、姉妹の母親でいまだにピンク色の大好きなダルドリゲール男爵夫人といった人々のことである。ビジウの風刺のきいた人物描写や巧みな話しぶりは冴え渡っているが、他の三人の聞き手と同様、読者にも、話の行方は不明である。全体の三分の二ほどまできたところで、読者もクーチュールのように、「君が投げつけるどの独楽をみても、ラスティニャックの財産の起源だと思えるようなものは見あたらないよ」[10]と叫びたくなるだろう。しかしそこから話はようやく、物語の中心であるニュシンゲン銀行の三度目の「清算」(liquidation)事件へと向かうのである。

このニュシンゲンの財力を決定的なものにした三度目の清算であるが、この筋書きも一読しただけでは理解しにくいと思われるので、要点を記しておきたい。すでにブロンデの話にあったように[11]、ニュシンゲンはこれまで二度にわたる虚偽の「清算」によってその財産と名声を築いてきた。最初は一八〇四年(第一帝政開始の年)、二度目は一八一五年(王政復古の年)であるが、彼は政情の不安に乗じて意図的に金庫を空にして、支払い停止を行い、債権者たちにはそれぞれ価値の乏しい「くず証券」や時価よりも安値で買った「ヴォルトシャンの鉱山株」で債務を弁済するということをした。この二回の清算によってニュシンゲンはかえって富を増やし、その名はヨーロッパ中に広まったのだった。しかし偶然のことながら二回とも、それらのくず証券や鉱山株はその後値上がりし、債権者たちを儲けさせる結果となった。悔しい思いをしたニュシンゲンは、三度目の清算では架空の株券で支払いすることを考える。そのために彼は、知り合いの銀行家デュ・ティエに話を持ちかけ、ある「からくり会社」を作らせて、クラパロンなる

男を表向きの社長に据えた。このクラパロン商会の株は、当初しばらくの期間はすばらしく値上がりし、その後急落するように仕組まれていたのである。ニュシンゲンはそのために「ピンクの紙で作った数百万の」「きれいな投資用の株券」を用意する。このように準備万端整えた上で、彼はいよいよ手持ちの資金五〇〇万フランをすべて、あるメキシコでの事業に投資し、金庫を空にして、自身はブリュッセルに出奔する。当時ニュシンゲン銀行では、預かっていた個別資産と発行した有価証券類が、合わせて六〇〇万フランの額に達していた。この個別資産の中には、ボードノールの全資産四〇万、ダルドリゲール男爵夫人の全資産三〇万も含まれていたのである。ニュシンゲンはこの六〇〇万を、手持ちの株券で弁済しようとする。その株券には、クラパロン商会の株の他に、ニュシンゲン自身が設立に関与した四つの企業の株――銀含有鉛山の株（鉱山株）、炭坑株、二つの運河の株――があった。ニュシンゲンは債権者たちに働きかけるピストンの役目をさせるために、妻の愛人ラスティニャックを利用する。ラスティニャックは、ニュシンゲンのそれとは知らぬ共犯者となって、友人のボードノールにニュシンゲン銀行の破産を知らせ、預けてある全財産を当時値上がり中のクラパロン商会の株券に換えてもらうことを勧める。彼はまたダルドリゲール男爵夫人にも財政危機を知らせ、預金を株券に換えさせる。それはクラパロン商会の株ではなく、銀含有鉛山の株であったが、これはニュシンゲンの手持ちの株の中では最良のもので、最初の雇い主であったダルドリゲール男爵に恩義を感じていたニュシンゲンの心遣いだった。証券取引所でもニュシンゲン銀行の破産の噂がセンセーションを巻き起こしたが、前の二度の清算のことがあるので、だれもニュシンゲンの手形を手放そうとしない。デュ・ティエとヴェルブリュストは、取引所で神託のような権威を持っているパルマを動かしてようやくパニックを引き起こし、売りに出されたニュシンゲン銀行の手形を買いあさり、まだ値上がり中の株券と交換したりなどして利鞘をかせぐ。このようにして預金や手形を株券と交換することで銀行の清算が終了するが、株券が値上がりしているので、だれも心配する人間はいな

い。ニュシンゲンは何食わぬ顔でベルギーから帰国し、二〇〇万の邸宅をポンと購入する。その後まもなく、メキシコに投資していた五〇〇万が、二艘の船に積んだ七〇〇万相当の金属類となって戻ってきて、十一ヶ月間に及ぶこの「金融芝居」は終局を迎える。つまりニュシンゲンは、手持ちの資金五〇〇万を七〇〇万にしただけでなく、六〇〇万にのぼる預金や手形を、あまり元手のかかっていない株券と交換することで、ほとんどそっくり手に入れたのである。それではいったいだれが損をしたのか。その後しばらくして、クラパロン商会の株価が暴落する。当初の虚偽の配当金にだまされて、クラパロンの株を持ち続けていたボードノールは、底値で売らざるを得なくなり、ダルドリゲール男爵夫人も、せっかくの銀含有鉛山の株を、クラパロンの株に換えてしまっていた。このようにして彼らは、没落の道をたどることになる。一方ラスティニャックは、事情はよくわからないままに、知人の預金を株券に換える労をとった謝礼や、ニュシンゲンからもらった銀含有鉛山の株券などで、二人の妹に四〇万フランの持参金を作り、自身も四万フランの年金を手にするにいたったのである。

以上が大まかな事件の筋書きであるが、さまざまな逸話や省察、人物描写や滑稽な「絵画的場面（タブロー）」を散りばめた四人の自然な会話は、それだけでは無味乾燥なひとつの金融操作を、現実の社会に密着した、生彩あるものにしている。銀行家の冷徹な戦略は、金融の世界に無知な人々――何不自由ない生活を送っているボードノールやダルドリゲール男爵家の婦人たちやその他多くの人々――の運命を翻弄するのである。また歴史的知識や文学的素養のある新聞記者ブロンデや、自身投機師であるクーチュールの介入は、「銀行」とは何か、「銀行」と「政治」の関係はどのようなものか、「株」とは、「投機」とは、現代の「産業」社会とはいかなるものか、経済社会と「法」の関係はどのようにあるべきかなどといった問題を、さまざまな角度から照射するものとなっている。

4　ゴプセックとニュシンゲン

以上、両作品の語りの枠組みを中心にして、その対照的な性格を検討してきたが、登場人物や物語の構成要素にもたがいに呼応する点がいくつかある。たとえば両作品はどちらも、夫と妻とその愛人という登場人物を持っている――レストー伯爵夫妻とマクシム・ド・トライユ、ニュシンゲン男爵夫妻とラスティニャック――のであるが、二人の夫人はそれぞれ、ゴリオの姉娘と妹娘である。フォーブール・サン＝ジェルマンの由緒正しい名門の貴族に嫁いだアナスタジーと、サン＝ラザール街の新興ブルジョワの銀行家に嫁いだデルフィーヌ。二人はそのまま古い世界と新しい世界を代表するといっても過言ではないだろう。また『ゴプセック』に登場する代訴人デルヴィルに対しては、『ニュシンゲン銀行』の中で、デルヴィルと対照的な代訴人デロッシュの姿がスケッチされている。二人を対比しているのはブロンデである。

「パリでは代訴人には二種類しかない。一方は正直な人間で、法律の枠内にとどまって訴訟を押し進め、仕事を追い求めるようなことはしないし、何事もないがしろにすることはなく、顧客には誠意をもって忠告し、勝訴の疑わしいときは示談をすすめる、要するにデルヴィルのような代訴人だ。そしてもう一方は、料金を払ってさえもらえれば何でもやる、腹をすかせた代訴人なんだ。あっちこっちでもめ事の種をまき散らすが、それも小さなものは商売の種にしておいて、大物同士を反目させるようなことをする。正直な人間が、たまたま借金を払えなかったりしたら、悪人の味方をして、正直者をやっつける仕事だって引き受ける。（中略）デロッシュ、われらが友人のデロッシュは、これまでつまらない連中がかなりぶざまにやってきたこの商売を理解した。つまりあい

つは、訴訟に負けることを恐れている連中にお金を出させてそれらの訴訟を買い取り、貧乏から抜け出る決心をした男らしく、果敢に複雑な訴訟沙汰の世界に飛び込んだんだ。やつの考えは正しかったし、自分の仕事を実に誠実にやってのけた。何人かの政治家の錯綜した事件を解決してやったおかげで、彼らの中に保護者を見つけた。たとえば、おれたちの親愛なるデ・リュポーなんかも、あぶない瀬戸際で助けてもらったひとりさ。」[12]

このようなデルヴィルとデロッシュの相違は、やはり旧体制と新体制の違いを浮き彫りにしている。つまりは「正直さ」が規範的であった時代と、金のためには手段を選ばない時代との相違である。

両作品のコントラストは、ゴプセックとニュシンゲンという二人の中心人物の上に集約される。彼らは、いずれも莫大な財産とその強大な力とを具現する人物でありながら、両者の違いは大きい。ゴプセックは、カルチエ・ラタンの陰気な薄暗い建物のアパルトマンで、人目を避けてひっそりと暮らし、一方のニュシンゲンは、美しい妻を持ち社交界に出入りする。ゴプセックは自分の財産を隠すのに対し、ニュシンゲンはそれを堂々と誇示する。ゴプセックのところに出入りする客は、「どの銀行へ行っても金を貸してもらえなかった」人々であり、人目を忍ぶ伯爵夫人や、ファニーやデルヴィルのような信用のない若者である。一方ニュシンゲン銀行の顧客は、ボードノールやダルドリゲール男爵夫人やデグルモン侯爵のような何不自由のない社交界の貴族であり、またシャルル・グランデやマティファのようなブルジョワ商人である。

バルザック自身、『プチ・ブルジョワ』（未完、一八四六年）という作品のなかで、ニュシンゲン銀行は、ケレール兄弟や、デュ・ティエ、モンジュノとともにパリ金融界の最上層を占めるのに対し、ゴプセックは、パルマやジゴネとともにその下に位置する二流の金融業者であると書いている。[13] 資産の大きさにしても、ゴプセックがエステルに遺した遺産の総額は七〇〇万フランであるのに対し、ニュシンゲンは一六〇〇万から一八〇〇万の財産を持っていると噂

されている。

しかしながらこの高利貸と銀行家の違いは、単にレベルや資産の大きさに還元されるものではないだろう。両方の作品を一読すればわかるように、ゴプセックの財産は、隠されてはいるが、きわめて物質的で手に触れることができるものであるのに対し、ニュシンゲンの財産は主に手形や株券など、貨幣の記号によって構成されている。ゴプセックは黄金やダイヤモンドに強い執着を持つ。レストー伯爵夫人のダイヤモンドを鑑定するときのゴプセックの様子、それを「むさぼり食おう」とするような仕草、ダイヤを手に入れたときの子供のような喜びようは特徴的である。またデルヴィルは、この小柄な老人のなかに「黄金の力を具現した途方もない姿」(une image fantastique où se personnifiait le pouvoir de l'or)[14]を認めている。実際、死を前にしたゴプセックは、部屋が「生きた黄金」でいっぱいになっている幻覚を見て、それをつかもうと手をさしのべるのである。そもそも「月のような」顔をして「黄色い小さな目」「金属のような目」を持ち、「フルートのような声」をしたゴプセックは、その存在自体が一個の黄色い金属であるかのようである。死に瀕したこの高利貸の顔色は、「レモンのように真っ黄色」になるのだ。彼の死後、デルヴィルが見いだした光景ほどすさまじいものはないだろう。暖炉の灰のなかに隠された金貨や銀貨の山、隣室に積み上げられた家具や銀器や骨董などの値打ちもの、そして何よりも腐って蛆のわいた食料品の数々。ゴプセックが強欲の果てに貯め込んだ財産は、ここに手に触れられる品物の堆積となって、屍のように横たわるのである。

一方のニュシンゲンは、こうした物質的な富に執着を持っているようには思えない。美しい妻は「彼の財産の表象(la représentation de sa fortune)」[15]に過ぎないし、豪壮な邸宅にしても同様である。こうした点は『獲物の分け前』のアリスティッド・サカールにも共通している。ニュシンゲンは直接金に手を触れることはなく、証券や株券を「交換」することで利益を上げるのであるが、その操作も単なる数字上の問題にすぎない。彼の資産は手で触れるこ

とのできない抽象的なものであるが、そもそもこの小説におけるニュシンゲンという人物自体が、ゴプセックの場合とは異なって、きわめて実体の乏しい存在なのである。『ゴプセック』においては、この高利貸の肖像（ポルトレ）は「牡蠣とそれが張り付いている岩のように」類似したその住居とともに、克明に描写されていたのに対し、『ニュシンゲン銀行』においてニュシンゲン自身はほとんど登場しない。彼の姿は、断片的なうわさ話のなかでスケッチされ、特徴的なアルザス訛りを持つ二、三の台詞によって表されるだけである。ビジウは、「彼の心に入り込むことなどできない」という。（これはあくまでも『ニュシンゲン銀行』においての話であって、「銀行家」ではなく「人間」としてのニュシンゲン男爵が描かれるのちの『浮かれ女盛衰記』のような作品の場合はまた別である。）ゴプセックの肖像（ポルトレ）が、作品中で言及されているようなレンブラントの油絵[16]であるとすれば、「立方体のよう（carré de base comme de hauteur）」で「太って、袋みたいにずっしり重く、外交官みたいに身動きしない」[17]ニュシンゲンの姿は、カリカチュア作者の素描であると言えよう。

両者の相違は、人間の運命に関する関心の度合いにも反映される。ゴプセックにとっては、「金はあらゆる人間の力を代理する」ものであって、「すべてを萌芽として含んでおり、すべてを現実として与えてくれる」ものである。[18]金のおかげで彼は「〈人類〉を動かしているすべてのバネ仕掛けを見通す」ことができる。[19]彼の目は「神の目」であり、彼と十人ばかりの彼の仲間は、「人に知られぬ王様」となって、パリのすべての家の秘密を握り、人々の「運命をどうにでも左右できる」のである。[20]ありとあらゆる修羅場を見てきたゴプセックは、金と人間の関係について深い洞察力を持っており、それはデルヴィルや若いエルネスト・ド・レストー伯爵に対する態度にも反映される。デルヴィルが代訴人の事務所を買うために金を借りにきたとき、ゴプセックはしっかりと一割五分の利息を取るが、後になって彼は次のようにその理由を述べる。「わしは君に、感謝の念を抱かずにすむようにしてやったのさ。わしには何の

借りもないと信じる権利を君に与えることでね。だからわれわれは、今もこの世でいちばんの友だちなのさ。」[21] ゴプセックはまた、レストー伯爵の死後、すぐにエルネストに財産を返還することを拒否するが、その理由は次の通りである。「不幸はわれわれのもっとも偉大な師匠だ。不幸は彼にお金の値打ち、男たちや女たちの値打ちを教えてくれるだろう。パリの海を航海するがいい。いい舵取りになったら、大型の船を一艘、進呈してやろう。」[22]「パパ・ゴプセック」（ゴプセックのあだ名）は「ペール・ゴリオ」とは、対照的な「父親」である。彼は「慈善というものは、それを施す側に害はなくとも、施された側を駄目にしてしまう」[23]ものであることを知っていた。

ゴプセックはこのように、財力によって人々の運命を支配し、世界を所有できることを確信しているのであるが、ニュシンゲンはどうであろうか。彼の金融操作は人々の運命を翻弄するが、この銀行家は他人の運命にそれほど深い関心を抱いているようには見えない。そこには濃密な人間関係はないし、強い愛着や深い憎しみもない。ラスティニャックが儲けるのは、彼が男爵にとって都合のいい人間だからであり、またボードノールが損をするのは、いつまでもクラパロンの株を持ち続けていた彼が悪いのだ。ダルドリゲール男爵夫人に対してニュシンゲンは、自邸での舞踏会に招待したり、マルヴィナをデュ・ティエと結婚させようとしたり、清算の際にはもっとも確実な銀含有鉛山の株を与えることで、彼にできるかぎり精一杯のことをしている。しかしデュ・ティエはニュシンゲンの策略を見破るし、愚かな男爵夫人は、せっかくの株をクラパロンの株に換えてしまった。「アソコニィルノハ、オレガドウシテモ財産ヲ作ッテヤルコトノデキナカッタ人タチダ」[24]という彼の最後の台詞は、人間の運命が彼の手に負えるものではないことを明らかにしている。

以上に見てきたようなゴプセックとニュシンゲンの相違は、時代の違いであると考えることもできる。確かに、両

作品の扱う年代はたがいに重なっている。末尾に付した年譜を参照してもらえればわかるように、ニュシンゲンの三回目の清算事件は、一八二六年から二九年にかけてであるのに対し、ゴプセックが死ぬのは一八三〇年一月のことである。しかし一七六三年生まれのニュシンゲンは、一七四一年生まれと思われるゴプセックよりも、二二歳ほど若い。ゴプセックが七月革命を待たずに死ぬことは象徴的であり、この高利貸は本質的に王政復古期以前の人間なのである。それに対してニュシンゲンの場合、その財産形成こそ七月革命以前に行われているが、彼は革命後に貴族院議員になり、レジオン＝ドヌール勲章を拝綬して、新しい体制の牽引役となる。すでに述べたように、一八三〇年の『不身持ちの危険』では、ゴプセック自身がこのような社会的栄達を引き受けていたことを思い起こすと興味深い。『人間喜劇』のなかにニュシンゲンがはじめて登場するのは、一八三五年の『ゴリオじいさん』においてであり、この作品の執筆後、同年の三月に、バルザックは『ニュシンゲン氏の破産』として、後の『ニュシンゲン銀行』をはじめて計画している。このようにして新しいタイプの銀行家が『人間喜劇』の中に出現してきた以上、ゴプセックの運命は変貌せざるを得ない。同年八月の『不身持ちの危険』の改変において、バルザックはゴプセックを王政復古期の消滅とともに死亡させたのである。一方のニュシンゲンは、新しい世代を代表する。彼はボードノールのような世襲の年金でのうのうと暮らしている貴族や中小ブルジョワを破産させて、新興大ブルジョワの巨大な財産を作り、鉱山や運河、鉄道をはじめとする各種の事業に資本を投下することによって、七月王政期から第二帝政期にいたるフランスの産業発展の中心的存在となるのである。

5　ニュシンゲンと新しい金融世界

「ニュシンゲン銀行」が、同時代の社会的・経済的文脈においていかなるものを表していたかを明らかにするためには、バルザックが一時作品の題名として考えた「オート・バンク」la Haute Banque[25]について、説明を加えておく必要があるだろう。大金融業者あるいは一流金融界を表わす「オート・バンク」には「金融貴族」という訳語が定着しているようであるが、これはきわめて歴史的射程の明確な用語である。すなわち十九世紀初めに出現し、金融市場に他の追従を許さない主導的地位を確立した二〇人ほどの銀行家の集団を表すのであり、その代表的存在は言うまでもなくロートシルド（ロチルド、ロスチャイルド）家である。『フランス政治史』（中木康夫著）によれば、一八一五年には「ほぼ完全に確立し、四八年までほとんど変容なしに存続した」パリのオート・バンクは、「最初卸売商業から出発し、国際貿易業（諸商品の買い付けと仲介）に貨幣取引業・為替取引業を合わせつつ、しだいに銀行業に重点を移行した。そして〈パリ貿易商の銀行〉として国際貿易金融を展開、保険業をも独占し、さらにナポレオン戦争後の諸国公債発行＝引受業務を独占するにいたる。パリのオート・バンクが、ユダヤ系、プロテスタント系など、外国出自の金融業者層を中核とするのは、そうした活動の国際的性格に関連する」[26]という。

ニュシンゲンはアルザス生まれ。父親は「野心のためにキリスト教に改宗したユダヤ人」である。このニュシンゲンの「メゾン」が実質的にどのようなものかについては、小説中でクーチュールの口から次のように説明されている。

「彼のところでは、銀行はごく小さな部門だ。政府への納入品もやっているし、ワインも羊毛も藍も、要するに多少とも儲けになるものなら何でもやっている。彼の天才はすべてを包含しているんだ。この財界の巨象は、も

し必要なら、政府に代議士だって売るだろうし、トルコ人にギリシア人だって売るだろう。彼にとって商業は、多様性の総体であり、個別性の統一体である、とクーザン〔ヴィクトール・クーザン、フランスの哲学者、一七九二―一八六七年〕なら言うところだろう。こんなふうに見れば〈銀行〉というのは、まったく一個の政治そのものであって、強力な指導者を必要とする。そして十分に鍛えられた男に、正直さという規範を超越させるんだ。そんな規範に縛られていては窮屈だからな」[27]

卸売り商業から出発し、しだいに銀行業を拡張していくこの組織は、すでに見たように、一八〇四年の第一回目の清算でフランス中にその名を知られるようになり、一八一五年の第二回目の清算では、ヨーロッパ中に勢力を広める。そして「三度目の支払い停止でもしようものなら、ニュシンゲン銀行の手形は、アジアでも、メキシコでも、オーストラリアでも、未開人のあいだでさえも、流通するようになるだろう」[28]と予言されるのである。

ニュシンゲンのモデルとして一般に考えられてきたのは、同じユダヤ系のロートシルド家、とくにパリの五男ジェームズ（一七九二―一八六八）である。『ニュシンゲン銀行』の中には、「彼（＝ニュシンゲン）はひそかに、ロートシルド兄弟をうらやんでいた」[29]という一節もある。しかしこの問題を検討したバルザック研究家 J.H. ドナールは、「ニュシンゲンとは誰か」という論考[30]の中で、ロートシルド家の財産形成は十八世紀末にさかのぼること、ロートシルド家では、五人の兄弟がヨーロッパ各都市に支店を作り、たがいに協力したのが特色であるのに対し、ニュシンゲンはセルフメイドマンであること、ロートシルドはユダヤ教を捨てず、また細心なまでの誠実さを信条としていたことなどを理由に、その説を退けている。ドナールは続いて、モデルとしての蓋然性が低いものから高いものへの順に、ニュシンゲンと同様の低い出自を持ち、二度の倒産を経て勢力を拡大した銀行家のレオン＝ベール・フール Léon-Beer Fould（一七六七―一八五五）、七月王政下で大蔵大臣を務めたことのあるジャン＝ジョルジュ・ユマン Jean-Georges

Humann（一七八〇－一八四二）、大実業家のウーヴラール Gabriel Julien Ouvrard（一七七〇－一八四八）、銀行家で政治家でもあったラフィット Jacques Laffitte（一七六七－一八四四）、そしてジャーナリズム界の大物で代議士でもあり、バルザックが『ニュシンゲン銀行』執筆の当時、株式がらみの詐欺事件を起こしていたエミール・ド・ジラルダン Emile de Girardin（一八〇六－一八八一）の名前を挙げて、それぞれニュシンゲンとの類似点と相違点を検討している。結論としてドナールは、ジラルダンの事件が直接的にはもっとも関連が深いが、ニュシンゲンはあくまでもさまざまなモデルが混合した人物であるとしている。

それに対して、フォリオ版の『ニュシンゲン銀行』を編纂し序文を書いているアンヌ＝マリ・メナンジェは、綿密な考証に基づいた詳しい論考[31]の中で、ニュシンゲンのモデルは、先に名前のあがっていたレオン＝ベール・フールであることをほぼ断定している。フールもやはりオート・バンクの一員であり、がっしりとしたその体格や出自、倒産事件などニュシンゲンとの類似点が多い。またバルザックが『ニュシンゲン銀行』を執筆したのは一八三七年一一月のことであるが、そのしばらく前から、フールとロートシルドは、鉄道事業においてライヴァル関係にあったという。フランス最初の鉄道がパリ－サン＝ジェルマン間に開通したのは、同一八三七年の八月二六日のことであるが、その前年の一八三六年、セーヌ右岸を通るこの線に対抗して、セーヌ左岸を通るパリ－ヴェルサイユ線が計画された。右岸路線をバックアップしていたのはロートシルドであったのに対し、左岸路線はフールが仕切っていた。両者の競合は株式市場にも反映され、株価は急騰したという。ところで世間一般にはあまり素顔の知られていないレオン＝ベール・フールであったが、メナンジェの調査によれば、バルザックの父ベルナール＝フランソワは、この銀行家のことをよく知っていたという。そしてバルザックは父親からフールの財産形成について、詳しい話を聞いたにちがいないというのである。

いずれにしても、バルザックの『ニュシンゲン銀行』は、鉄道をはじめ、鉱山、炭坑、運河などさまざまな事業に精力的に投資していたパリのオート・バンク勢力の成立を背景にした作品であることは間違いないだろう。先に引用した『フランス政治史』によれば、王政復古期（一八一五－一八三〇）において、自立した貨幣貸付業者であった彼らは、鉱山、製鉄、綿業などの工業資本を金融的に支えるとともに、公債の発行＝引受業務を独占することで勢力を伸ばし、土地所有に対抗して貨幣的富を蓄積していった。政治的には、復古王政の支持基盤である大土地所有者層（新旧貴族や上層ブルジョワ）とともに、立憲王党の一翼を担い、とりわけギゾーやペリエら、左派の純理派 Doctorinaires との結びつきを強める。そして七月王政下ではついに、大土地所有者層との立場を逆転させ、体制の中心的な支持基盤となるのである。ふたたび『フランス政治史』から引用する。「産業革命が本格的に展開され、農業部門の停滞に比して商工業および金融部門が成長していく七月王政下においては、大金融貴族の利害が何よりも貫徹されていくのであり、（中略）まさにこの点で七月王政は、〈土地の王朝〉としての復古王政に対比して〈貨幣の王朝〉であり、金融貴族の利害擁護の体制と見なしうるであろう。」[32]

土地から貨幣への転換。この経済構造の変化は、そのまま『ゴプセック』から『ニュシンゲン銀行』への変化に対応しているのではないだろうか。『ゴプセック』の語りの舞台であるグランリュー家は、デルヴィルの手腕によって、土地財産を回復した亡命貴族であったことを思い起こしたい。バルザックは同時代の社会経済の変動を鋭敏に嗅ぎとっているばかりでなく、すでに検討してきたように、それを物語の構成要素や、文体、語りの様態などの文学的形式の変化にまで押し広げているのである。

ニュシンゲンは同時代の人物をモデルにしたものであるとはいえ、新しいタイプの「銀行家」を『人間喜劇』の重要人物に据えた点で、バルザックはやはり将来を予言していたと言える。ニュシンゲンたちは、その後のフランスの

経済成長を背負っていくことになるだろう。そして土地から貨幣への価値転換は、第二帝政期に実行されたオスマンのパリ改造事業によって、ますます拍車がかかることになる。最後はやはり、ゾラのバルザック論で締めくくっておくことにしよう。

> もし彼［＝バルザック］が生きていて、公けの富のこのような略奪に立ち会ったなら、もし彼が、恥ずべき植物のように一夜にして生まれ、翌日には贅沢の狂乱の中に運び去られてしまうあれらの財産を目にしたならば、彼はこんなふうに書いたことだろう。「おれの悪党どもの支配する時代がやってきた。連中は、おれが描いたよりも、ずっと卑劣で、ずっと貪欲だ」と。[33]

［参考資料］

『ゴプセック』関連年譜

一七四一年　アントウェルペンの郊外で生まれる。父はオランダ人、母はユダヤ人。

一七五一年　一〇歳のとき、見習い水夫として、インドへ行く船に乗り込み、二〇年間、彼の地で波瀾万丈の冒険生活を送る。その後、西インド諸島やアルゼンチン、アメリカなどを転々とする。

一七九三年頃　パリでヴェルブリュストやジゴネとともに、手形割引と高利貸を始める（『平役人』参照）。

一八一六年　隣人のデルヴィルと知り合う。レストー伯爵夫人は、一〇〇〇フランの為替手形の支払いを延期してもらうために、ゴプセックに一二〇〇フラン相当のダイヤモンドを渡す。

一八一九年　デルヴィルに事務所を買い取るための一五万フランを貸す。

一八二〇年　レストー伯爵夫人はマクシム・ド・トライユの一〇万フランを用立てるために、レストー家のダイヤモンドをゴプセックに売る。伯爵はすぐに買い戻すが、夫婦の間には決定的な対立が生じる。

二月二一日、ショックのため父親のゴリオは死亡（『ゴリオじいさん』参照）。
一八二四年　レストー伯爵死亡。
一八三〇年　一月、ゴプセック死亡。デルヴィルはグランリュー子爵夫人のサロンで一連の話を語る。

『ニュシンゲン銀行』関連年譜

一七六三年　アルザスで生まれる。父は「野心のためキリスト教に改宗したユダヤ人」。
一七七五年　一二歳のとき、ストラスブールの銀行家ダルドリゲールに雇われる（『娼婦盛衰記』参照）。
一八〇〇年　ダルドリゲールはマンハイムのアドルフュス商会の跡取り娘と結婚。マルヴィナ、イゾールの姉妹が生まれる。
一八〇四年　ニュシンゲン銀行は第一回目の清算を行う。ストラスブールとパリのボワソニエール界隈でしか知られていなかった彼の名前は、フランス中に広まる。
一八一四―一五年　ダルドリゲール銀行が破産。ダルドリゲールは正直に債務を支払い、銀行業から手を引き、残りの資産をニュシンゲンに託す。
一八一五年　ニュシンゲン銀行は第二回目の清算を行う。彼の名前はヨーロッパ中に広まる。
一八二三年　ダルドリゲール男爵死亡。
一八二六年　ボードノールは、ニュシンゲン夫人の舞踏会でイゾール・ダルドリゲールに出会い、一目惚れする。
一八二六―二八年　ニュシンゲン銀行は、三回目の支払い停止をし、債権者には株券で債務を返済する。
ボードノールはイゾールと結婚。
一八二九年　クラパロン商会の株価が急落し、ボードノールとダルドリゲールの一家は大損して、困窮状態に陥る。
一八三〇年　七月革命後、ニュシンゲンは貴族院議員となり、レジオン＝ドヌール二等勲章を受勲。
一八三六年　ビジウら四人が、ナイトクラブの個室で会食し、一連の会話をする。

〔注〕

(1)　本論は、藤原書店より刊行予定の〈バルザック『人間喜劇』セレクション〉第六巻収録作品、『ゴプセック』『ニュシンゲン銀

行』『ゴディサール』（拙訳）に付した訳者解説と重なる部分が多いことをお断りしておく。

(2) Emile Zola, *Œuvres complètes*, édition établie sous la direction de Henri Mitterand, Cercle du livre précieux, tome 10, 1968, pp.924-930. （この全集は、以下*OC*と略記する）

(3) *Ibid.*, p.924.

(4) Emile Zola, *Correpondance*, éditée sous la direction de B.H.Bakker, Les Presses de l'Université de Montréal, tome 2, 1980, p.218.

(5) *OC*, tome 10, pp.928-929.

(6) Honoré de Balzac, *La Maison Nucingen*, in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome 6, 1977, pp.329-392. （以下*MN*と略記）

(7) *Ibid.*, *Gobseck*, in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome 2, 1976, pp.961-1013. （以下*Gb*と略記）

(8) *Gb*, p.1009.

(9) *MN*, pp.331-332.

(10) *Ibid.*, p.369.

(11) *Ibid.*, p.338.

(12) *Ibid.*, p.356.

(13) Honoré de Balzac, *Les Petits Bourgeois*, in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome 7, 1977, p.120.

(14) *Gb*, p.977.

(15) *MN*, p.333.

(16) テクストには、「レンブラントの筆にふさわしいようなオランダ人」（p.1012）とある。別の箇所では、「皆は、レンブラントがメッツーの描く錬金術しか小柄な老人のように薄い唇でした」という表現もある。メッツーも十七世紀オランダの風俗画家（一六一九―

一六六七）である。『ゴプセック』の中には油絵への言及は他にもあり、美しいレストー伯爵夫人の姿は、「レオナルド・ダ・ヴィンチの筆になるヘロデアのひとり」にたとえられている。しかしレオナルドにはそのような絵はないので、おそらくレオナルド派のベルナルディーノ・ルイーニの描いたサロメの絵であろうと言われている。またゴプセックが死ぬ場面は、ルチエール（一七六〇－一八三二）という画家の一八一四年の作品『息子たちに死を宣告するブルータス』の中に描かれているローマの老人の姿にたとえられている。

(17) *MN*, p.339.
(18) *Gb*, p.969.
(19) *Ibid.*, p.970.
(20) *Ibid.*, pp.976-977.
(21) *Ibid.*, p.995.
(22) *Ibid.*, p.1008.
(23) *Ibid.*, p.975.
(24) *MN*, p.391.
(25) バルザックは一八三六年一一月に、『オート・バンク』のタイトルで、この作品を〈フィガロ〉紙のアルフォンス・カールに、ついで〈プレス〉紙のジラルダンに売り込んでいる。後者が連載小説として掲載することを引き受けたが、実際に完成したのは、その約一年後であった。
(26) 中木康夫著、『フランス政治史（上）』、未来社、一九七五年、p.47.
(27) *MN*, p.339.
(28) *Ibid.*, p.338.
(29) *Ibid.*, p.369.
(30) Jean-Hervé Donnard, 《Qui est Nucingen?》, in *L'Année balzacienne*, 1960, pp.135-148.
(31) Anne-Marie Meininger, 《Préface》 à *La Maison Nucingen* précédé de *Melmoth réconcilié*, Gallimard, coll.

《Folio》, 1989, pp.7-64.

(32) 前揭書, pp.61-62.

(33) *OC*, tome 10, p.929.